

Jビレッジにおける福井大学の活動報告

医学部附属病院救急部助教 小淵 岳恒

平成23年3月11日東日本大震災による大津波により東京電力福島第一原子力発電所は全電源喪失し水素爆発を起こすという事態になった。爆発した1号機から4号機は各々損傷の度合いは異なるもさらなる事態の悪化を防ぐべく多くの作業員がプラント内で作業をしないとイケないような状況を余儀なくされた。震災当初はまだプラント内の状況の全体を把握する事は困難でありがれきも多く、線量も非常に高い状態であった。作業員はみな復旧作業中に大けがをした時や、高線量被ばくを受けた時にはどのように対処をすべきなのか不安を抱えながら作業をしないとイケない状況であった。

本来であればオフサイトセンター（原子力防災センター）が中心となり現場と連携し活動を行うべきであるが、震災の影響でオフサイトセンターは機能を停止し本来の役割を果たせなくなった。新たに福島県庁内にオフサイトセンター機能を移転し、福島第一原子力発電所より約20km離れたJビレッジ内に作業員の活動拠点を設置し、そこに医療班や自衛隊、電力会社、原子力保安院が参集し活動を行うこととなった。

Jビレッジでの被ばく医療班のおもな活動内容としては、原子力発電所内にて発生した重症患者（心筋梗塞などの内科的疾患、重量物落下事故などによる外科的疾患）の対応と高線量被ばくを受けた患者に対する初期治療を行うことであった。オフサイトセンターと連携し、まさに前線基地としてあらゆる患者に対し初期対応を行わなければならない、通常の救急医療活動とともに緊急被ばく医療を行える医師は全国的にも少なく、福井大学はその中でも多くの人材を派遣し大きくJビレッジ活動に貢献したと思われる。

Jビレッジ内メディカルセンターに医療班の活動拠点を置いたが、本来スポーツ選手の健康管理を行う施設であり緊急被ばく医療向きではなかった。そのため緊急被ばく医療ができるように施設を少しずつ被ばく医療活動向けに改善する必要がある。また通信手段が十分に確立できていない時期は連絡手段が少なく、原子力発電所内とオフサイトセンターとの連携が非常に困難であった。時間の合間をみてJビレッジ、オフサイトセンター、自衛隊、福島県立医科大学、電力会社と合同

で訓練を何度も行ったが、当初は原子力発電所内に医師が常駐しておらず、搬送手段も電力会社の搬送車であったために初期情報が非常に不確実であったが、訓練を重ねるごとに課題点をみつけることができ、各部署で議論を行い改善することができたと思われる。このことより普段から訓練を行い顔の見える関係を構築する事が非常に重要であることを感じた。

実際に原子力発電所内にて心筋梗塞に伴う心肺停止患者や高所からの転落外傷患者などが発生しオフサイトセンターと連携し初期治療や患者搬送をおこなったが、患者は内科疾患+被ばく、外傷+被ばくといった複合的になることを実感した。緊急被ばく医療を行う医療者として、緊急被ばく医療のトレーニングコースを受講することのみならず、心肺蘇生のトレーニングコースや外傷初期診療のトレーニングコースを受講することが必須であろうと思われた。今回のこの経験を生かし、今後本大学にて人材を育成する際に役立てたい。

Jビレッジでの活動を通して今後の福島県内における緊急被ばく医療の体制を再度考え直す必要があり、特に医療活動に関して言えばオフサイトセンターの機能の見直し、Jビレッジのような現地救護所の医療班との連携をより緊密にすべきであり、後方支援となる医療機関・放射線専門機関との連携も必須である。そのためには定期的な訓練を行い、医療者・消防・警察・行政・事業者・地域住民がお互いに正しく理解する必要があると思われる。また緊急被ばく医療に携わる人材の育成も重要である。福井大学では「緊急被ばくに強い救急総合医養成コース」を立ち上げ、人材の育成に取り組んでおり平時には地域の救急総合医療に従事し、有事の際には緊急被ばく医療の中心的役割を担う医療者を養成している。



Jビレッジ内での訓練の風景